



# 「学生協働」に期待する

鶴 衛 学長

大学は今、さまざまな改革を迫られている。例えば、グローバル化への対応、あるいはイノベーション創出のための教育・研究環境づくりなどである。安倍内閣の教育再生実行会議が平成25年5月に出した第3次提言では、それらのほかに「学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能を強化する」よう大学に求めている。さらに、具体的には「大学は、学生の能動的な活動を取入れた授業や学習方法（アクティブラーニング）、双方向の授業展開など教育方法の転換を図る」

こととある。

つまり、「学生を鍛え上げる」とは、一方的に厳しく教える教育よりもむしろ、学生の主体性・自主性を重んじる教育への質的転換である。図書館も学生の自学自習を支援する「ラーニングコモンズ」の場として役割がますます重要になってくる。

これらの改革を実現させるには、教員だけでは無理だし、経営事務職員だけではもちろん不可能である。「教職協働」、つまり教員と経営事務職員が力を合わせてはじめて可能になる。そこで重要なことは、力を合わせる“旗印”の存在である。それぞれの大学が掲げる教育理念や目標などがそれに当たる。

本学には建学の精神「教育は愛なり」、そして教育方針「常に神と共に歩み社会に奉仕する」がある。この2つの教育理念には「協働」と相通じるものがあると思う。

本学の附属図書館では、大学院生が図書館学生アドバイザーとして活躍している。図書館業務の一端を学生が担い、他の学生の学習を支援する「学生協働」である。まさに本学の教育理念を具現化する素晴らしい活動に他ならない。

教育改革に「教職協働」が欠かせないのはもちろん、学生の理解と協力なしには成り立たない。「学生協働」に頼もしさを感じ、期待するゆえんである。

# 「本気」でなければ 意味がない

三熊 祥文 館長



1980年代のアメリカテレビドラマで、大学生の主人公が人文系の必修科目の単位を取るために、大学のテレフォン相談センターでのボランティアをするエピソードがありました。同級生の同僚と2人しかない夜に、ある学生から「自殺をしようかと思っている」という深刻な悩み相談の電話が掛かってきます。最初はマニュアルどおりの対応をしようとするのですがうまくいかず、結局自分をさらけ出して本気で誠実に励ますことで相談者を前向きにさせるストーリーでした。いくら研修を受けた身とは言え大学1年生の素人にこんなヘビーな相談を担当させるとは、と驚いたものですが、それ以上に驚いたのは、学生が単なるシミュレーションではなく本当に相談員になって仕事をするのがアメリカの大学のカリキュラムの一部に

なっているということでした。

さて、現在図書館界で話題の中心となっている「学生協働」もまさにそのような「本気の仕事参加」の1つの形だと言えます。「図書館業務の一端を、職員とともに、利用者でもある学生が担う」ことを意味する「学生協働」においては、単位化こそされないものの、学生がちょうど上記の物語と同様のシチュエーションに置かれます。大学という教える者と教わる者の作り出すコミュニティを円滑に運営していくための営みに、旧来は教わるだけの立場だった者が運営する側として関わるといった役割のシャッフルは、単に教室での学習者活動を活発化させるのとは一線を画す「本気の社会参画」によるアクティブラーニングです。学習にはコミュニティの成立が重要要件であると考えてのが社会構成

主義による学習論です。職員、学生いずれもそのコミュニティの構成メンバーであるからには、そのコミュニティを維持発展させる任務を帯びていると考えるべきであり、一方で図書館業務に参加しながら他方で図書館の資料にアクセスし、授業その他の学びに資する学生は、まさにあるべき「学習コミュニティの成員」を代表していると思われます。

「本気」でなければ意味がない。それは、単なるシミュレーションとしてではない学習の場作りへの参画の必要性を意味し、「学生協働」はそういった状態を実現するためのコンセプトなのです。